

## 毎日新聞 5月5日「特集」

政府は5月4日、新型コロナウイルス感染症対策本部を開き、6日に期限を迎える「緊急事態宣言」を31日まで延長することを決定した。5日の毎日新聞も「新型コロナ関連」に多くの紙面を割いている。コロナについて、じっくりレポートしていくが、記事のなかで3本の「特集」に注目したので、すこし紹介したい。

まず2面全体を使った「広島からヒロシマへ 被爆75年」特集。リードから一原爆投下前の広島の街並みを撮影した写真には、「広島」と記された時代の記憶が宿る。人類史に刻まれた「1945年8月6日午前8時15分」から今夏で75年。毎日新聞が所蔵する写真資料とヒロシマの証言や記録を重ねながら、原爆が奪ったものをたどった。

写真は1934年ごろ、広島県産業奨励館（現原爆ドーム）前の通りから南西を撮影。下は2017年6月、原爆投下の目標とされたT字型の相生橋から南を望む。その他の写真からも、「広島 記憶の街並み」「45年夏 消えた人影」に思いを馳せる。



次に2面半分ほどの「ヤングケアラー 反響特集」。リードから一通学や仕事をしながら家族を介護する子ども「ヤングケアラー」の問題をめぐり、毎日新聞は3月22日朝刊で、全国に15～19歳の介護者が推計3万7100人いるとの独自の集計結果を報じた。一連の報道には電子メールなどで多くの意見が寄せられ、「自分もそうだった」という声や深刻な介護の現実、家族や専門家の苦悩がつづられていた。



正直なところ、この特集を読むまで「ヤングケアラー」について、あまり関心がなかった。「老老介護」は、わがこととして関心があったが。「家族のため 子に重く」という見出し、ヤングケアラー10種類のイラストが心に残った。

もう一つは沖縄の光と影 伝える「地域特集」。写真の新聞は、大阪府南部を活動エリアとする大阪いずみ市民生活協同組合（本部・堺市）が2016年から毎年発行している「高校生沖縄特派員新聞」。文字通り高校生を特派員として沖縄に派遣し、沖縄戦の経験者や戦跡、米軍基地の様子、県庁の基地担当職員、沖縄の高校生らを取材してもらう。高校生特派員は、沖縄の地で見たこと、感じたことを記事にしている。



(2020年5月6日)